

青森県近代文学館報

特別展「青函を旅した文人たち」

会期 平成28年7月9日(土)～9月22日(木)

島崎藤村は明治37(一九〇四)年7月、『破戒』出版の相談で義父を訪ねるため、青森から函館へと渡りました。同年9月、石川啄木は野辺地に伯父を訪ねた後、青森から連絡船・陸奥丸に乗り、北海道へ渡りました。『三千里』の著者で、正岡子規門下四天王の一人である河東碧梧桐は、明治40年に青森と北海道を往来しています。宮沢賢治は大正12(一九二三)年夏、青函連絡船に乗り、樺太旅行へと出発。この旅で「青森挽歌」をはじめとする作品群を生み出しました。大正14年に青森県内を巡遊した与謝野鉄幹・晶子夫妻は、昭和6(一九三二)年には函館へ旅行。石川啄木の墓参を果たし、今日、立待岬には夫妻の歌碑が置かれています。青森と函館、両地を旅した文人たちの足跡を貴重な資料とともに紹介する展覧会です。

本展の開催に併せて、県内外の関係者・文化人・研究者等を招いて二回の文学講座を開催いたします。津軽海峡

を挟んで向き合う二つの都市に残された、与謝野晶子、石川啄木、宮沢賢治をはじめとする著名な文人たちが青森・函館の文学に与えた影響に迫る企画となる予定です。年々参加希望者が増えていることを受け、今回からは第一回、第二回ともに当館に隣接する青森県総合社会教育センターの大研修室で開催することにいたしました。講座の詳しい内容や申込みの方法については7月上旬完成予定の本展ちらしをご覧ください。チラシはHPでもご覧いただけるようにいたします。

特別展

「青函を旅した文人たち」文学講座

第1回 平成28年7月24日(日)

13:15～16:30

第2回 平成28年8月21日(日)

13:15～16:30

会場

青森県総合社会教育センター

大研修室

目次

- ・特別展「青函を旅した文人たち」……………1
- ・特別展「青森の文学者たちの戦前・戦中開催報告」……………2
- ・三浦雅士氏講演より……………3
- ・企画展「戦後―青森文学と青森の復興―開催報告」……………4
- ・企画展「青森近代文学館名品展」文学者たちの絆開催報告……………5
- ・エクステンド常設展示 修司と修治……………6
- ・第14回青森県近代文学館川柳大会……………6

平成二十八年度企画展

□「三上強二寄贈資料展」

会期 4月29日(金・祝)～5月25日(水)

平成27年1月に急逝した三上強二氏(昭和3～平成27、青森市出身)は、戦後、青森県立図書館に約30年勤務し、県内外の数多くの文化人と交流。青森県文化の語り部として広く知られ、日本図書館協会顧問や青森ペンクラブ会長を務めた人物です。青森県立郷土館を定年退職した平成元年から翌年にかけては「東奥日報」に随想「訪廬庵雑記」を連載しました。幾度も文学講座の講師を務めるなど、平成6年にオーブンした当館の活動を力強く支えてくださった方です。生前にご寄贈くださった広範な文学資料を展示するとともに、その文学者たちとの多彩な交流や青森県の文化の継承と発展に寄与した足跡についてご紹介いたします。

□「青森県俳句懇話会寄贈資料展」

会期 2月25日(土)～5月24日(水)

青森県俳句懇話会が平成27年度の事業として会員から収集した色紙、短冊、自筆原稿、遺品等四百点余りを来年度当館に寄贈していただくこととなりました。

- ・企画展本はもう一人のわたし 堤童文学者 鈴木喜代巻……………7
- ・エクステンド常設展示 葛西善蔵……………8
- ・「日曜午後の朗読会」……………8
- ・パネル展開催……………8
- ・資料寄贈者紹介……………9
- ・新収蔵資料紹介……………11
- ・3・11展、館務日誌……………12

た。本展ではこれらの資料を中心に紹介いたします。増田手古奈、高松玉麗、成田千空ら県出身俳人だけでなく、正岡子規、高浜虚子、大野林火ら中央の俳人の作品も多く含まれています。

エクステンド常設展示

今年度新たな企画としてスタートした「エクステンド常設展示」。常設展示している13人の作家たちから毎回一人以上をピックアップし、コーナーを拡大して、展示しています。第三回目の今年6月3日(金)からは、太宰治と、没後30年となる石坂洋次郎の展示をします。戦後、対照的な生き方をしたと言われる二人の展示をお楽しみ下さい。長期休館後の12月23日(金・祝)からは佐藤紅緑と没後70年となる福士幸次郎を取り上げます。多数のご来館をお待ちしています。

長期休館のお知らせ

11月24日(木)～12月22日(木)の間、館内システム更新等の為、休館いたします。青森県立図書館も同期間休館です。ご迷惑をおかけいたしますが何卒よろしくお願いいたします。

特別展「青森の文学者たちの戦前・戦中」開催報告

平成27年7月18日(土) から9月23日(水) まで、特別展「青森の文学者たちの戦前・戦中」を開催しました。戦後70年を機に、青森の文学者たちが戦前・戦中をどのように生きたのか振り返り、文学が持つ力の大きさに光を当てようと試みたものです。青森県出身・在住の文学者たちも大勢が時代の波に翻弄された訳ですが、次の6人の方からご寄稿を賜り、その実態に肉薄することができました。

- ・三浦雅士「戦前戦中戦後の意味」
- ・平島高文「菊谷栄 戦死の衝撃」
- ・館田勝弘「石坂洋次郎と「マヨンの煙」」
- ・井上直哉「北村小松「火」について」
- ・安田保民「今官一と戦艦長門」

・高橋秀太郎「国策に添うこと、文学であること―太宰治『惜別』―」

パネルとしては、この他、当館職員の手により、昭和元年から20年までの概説と「戦前・戦中における青森県文学史年表」を用意。人物・時代の二方面からアプローチし、それぞれのパネルに近接した形で関係資料を展示する



「青森の文学者たちの戦前・戦中」表紙

という形を取りました。

話題性の高かった資料は、他館からお借りしたものではありません。高木恭造「まゐるめろ」初版本(弘前市立郷土文学館蔵)、『青森県プロレタリア詩集』(五所川原市立図書館蔵)といった稀覯本、三田循司宛太宰治葉書2通(日本現代詩歌文学館蔵)、『正義と微笑』(右大臣実朝)、『惜別』の意図の太宰原稿3点(いずれも日本近代文学館蔵)等が挙げられます。とりわけ「秋田雨雀日記」(昭和20年7月9日〜10月28日)(日本近代文学館蔵)は、終戦の日、雨雀は既に日本の再建や新政府のことを考えていた様子が読み取れる印象深い資料でした。

自館蔵の資料としては、北村小松の少年科学小説「火」上下巻、菊谷栄草稿「エノケンの千万長者(後篇)」、石坂洋次郎原稿「マヨンの煙」、今官一が戦艦長門乗船中に軍服の下に忍ばせていたノート「長門配乗記」等が挙げられます。この他「お伽草紙」草稿は、太宰治が戦火をくぐり抜けて生み出した奇蹟の物語であり、本展を象徴する存在として、ポスターや図録の表紙にも写真を載せました。

「月刊東奥」等、戦時下の雰囲気が見える雑誌を多数展示し、総資料点数は158点となりました。合計五、四四八人の方が足を運んでくださり、盛況のうち閉展を迎えました。



開会式(テープカット)
左から安田保民氏、佐藤幸館長、佐々木達司氏

講演「津軽疎開時代の太宰治」
仁平政人(弘前大学教育学部講師)
講演「本と戦争」
佐々木達司
(元青森県文芸協会出版部長)

日曜講座

平成27年9月13日(日)

青森県立図書館研修室

参加者21名

講演「昭和元年から終戦までの

青森県文学史」

竹浪直人(青森県近代文学館主査)

関連イベント
第1回文学講座
平成27年7月26日(日)
青森県総合社会教育センター大研修室
参加者121名

講演「戦時下の読書から得たもの」
佐藤さむ

(日本エッセイスト・クラブ会員)

講演「歴史と人間

——戦中戦後の意味と無意味」

三浦雅士

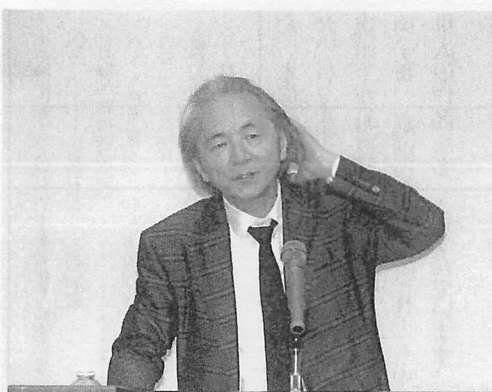
(文芸評論家、日本藝術院会員)

第2回文学講座

平成27年8月23日(日)

青森県総合社会教育センター大研修室

参加者90名



講演中の三浦雅士氏

三浦雅士氏は第1回文学講座の中で、本特別展の図録の意義について言及してくださいました。該当部分の要旨を左ページに掲げさせていただきます。寄稿者・講師の方々をはじめ、この特別展のためにご尽力を賜りました皆様に改めて感謝の意を表します。
(竹浪直人、青森県近代文学館主査)

【三浦雅士氏講演より】

この『青森の文学者たちの戦前・戦中』というのは良く出来ていると思います。概説つていう部分があつて、戦前と戦中のことを書いています。それからその間に、私も寄稿させていただいたんですけど、私も、何人かの方々が、石坂洋次郎とか菊谷栄とか、それから太宰治とかに關しての、短いエッセイですけど、本質的な問題を書いています。そういうふうな作りになっている冊子で、とても意義があると思います。特に一番強い意味があると思うのは、一九六〇年代の感覚が漂つてくるんですね、この冊子全体に。その結果どういふことが起こつてくるかという、この概説を読む限りは、青森県の文学者たちつていうのは、左翼運動、ピークは共産党ですけども、その運動に關して、非常に主体的で大変力強い運動つてのをやって来たつてことが分かる形になつてます。戦前戦中つていうのが、軒並み竹内俊吉だろが淡谷悠蔵だろが、誰でもいいから名前を挙げてみて、ずっと読んでみると、その他の人たちも非常に困難にめげずにやってきたつていうふうなことです。それが書かれています。青森つていう場所から始まつて、青森が一つの有機体というふうな感じになつて、その有機体の中でこういふふうな文学雑誌を出したんだ、こういふふうな新聞を出したんだ、その段階で考えてみたら、ちょっと画期的に非常に早いだけじゃなくて、立派なものですよつていうのが良く分かるような形に書かれています。

す。それが何で異様な感じを与えるか、非常に良く出来ている、だけでも、一九六〇年代七〇年代のことを思い出しちゃうよつていうふうな言ひのは、そういうの全然ないんですよ。青森に全然ないんですよ、そういう運動は今現在。この戦前の連中のやつたこと戦中やつたことに比べたら今やつての何やつてんだよつていうくらいに何にもやつてないですよ。そのことを痛切に感じさせます。それはね、じゃあどういふことなんだつて言えば、今主体がないんですよ、青森に。翻つて考えてみれば、今何やつてんだろつていうことですね。その問題を浮き彫りにしていると思います。その中でもなおかつつと戦前から戦中戦後にかけて出てくるものつていうのは、個別に書かれてある、石坂洋次郎、太宰治、それから菊谷栄、その人たちがやつてきたことつていうのは、何で今もなおかつ残つてるかつて言つと、戦前戦中戦後つていうことに関係なく、戦中も戦前も色んなことがあつたけれども、これは決定的に重大だつていうようなことをやつてるつていう。左翼運動やつてるつて言つた場合に、お前本当に、そう思つてやつてるのか？それともそうじゃなくて時流にこういふふうなの流行つて、それで今ここでこうやつて苦惱して、それは演技してるんじゃないの？つていうふうなのを言つたのが石坂洋次郎だし、太宰だし、それから戦後になると寺山修司で、その要素になるものが菊谷栄にもあつた

とほくは思う。その仕組みに關して、つまり人間の機微に關して、石坂洋次郎もそうなんですよ本当は。「若い人」つていうの読めばすぐに分かりますよ。ね、それは。石坂洋次郎はすごく明朗で明るくて何とかがつてふうな言われてるけどもんでもない、非常に暗い部分がいっぱいあるつてほくは思うけれども、そういうふうな問題を抱えてたから残つてるんだ。で、表向きの所つていうのは、左翼つてのは全盛だと、それに関しても青森つていうのは非常に主体的に動いて大変な運動つてのをやつてたんだ。そういうのが立体的に分かつて本当に良いです。それからもう一つ、今現在のその青森はどうなつてんだよつて言つたことに関しても言へば、実は青森だけじゃないんですよ、問題は。青森がだらしがなくなつて主体的じゃなくなつちやつてるじゃないかつていうふうなこと言つたけれども、日本全国なんですよ。戦前戦中に関しても言へば違う。この形で行つた場合にはこうなつちやつて、これおかしいんじゃないかと、絶対にこれではない筈だつていうのがどうしても出てきちゃうつてのは、理想がある、もつとも理想的なのはこういふふうな社会だとかつていう理想があつて、その理想に關して言えば、有無を言わせない所があつた。例えば共産主義に關して言えば、あるいは共産主義でないまでも無政府主義に關して言えば、若い知識人つていうのはみんなそつちの

方に行くつていうふうなのがあつたらなんだけども、その理想の部分どうなつたら良いんだろ、世界はどういう方向に行つたら良いんだろつていうのが全部ないんですよ。それがなくなつちやつたつていうことはですね。青森のせいだけじゃない。3人のキュレーターの方が、これ執筆したというふうな考えましたけど、すごく身もたえしながら書いてますよ。つまりね、両方に氣つかつて書いてるつていう。何に氣つかつて書いてるかつていうとね、つまり、理想主義・共産主義つてふうなのあつたんだよつて、それは良いんだ、けども一方的に良いいとばかりもいかないんだよな、それに対する反措定もあつて、それもまた説得力があつてつて、何とも身もたえしながら書いてる部分もあつて、随分苦勞して書いてらつしやるんだなと思つて感心したんですけど、その結果浮き彫りにされてるのは結局、今現在の状況つていうものが、いかに駄目かつていうことと、その駄目さつていうのが青森だけじゃないんだつていうこと。本来で言えば青森の人たちつていうのは昔の感覚で考えれば、だつたら青森が頑張つて日本全体に影響を与えればいいじゃないかつていうふうに行つたんだけども、そこに行くだけの覇氣もないんですよ、もう。それがすごく良く浮き彫りになつてる。そういうふうな意味で言つと非常に良く出来ていると思います。

企画展「戦後―青森文学と青森の復興」開催報告

10月24日(土) から12月13日(日)

まで、企画展「戦後―青森文学と青森の復興」を開催しました(総資料点数268点)。本展は特別展「青森に文学者たちの戦前戦中」に続く戦後70年企画の第二弾として開催し、会期中は三、二九一人の方に足を運んでいただきました。青森の戦後は青森空襲に始まる」といっていて、本展の対象期間を青森空襲の夜から今日この瞬間までと設定し、左記の通り全12章立てとしました。



- 第1章 青森空襲と暖鳥
- 第2章 カストリ雑誌
- 第3章 公職追放
 - ― 加藤謙一・北村小松
- 第4章 北島八穂の戦後
- 第5章 石坂洋次郎の活躍
- 第6章 太宰治と戦後
- 第7章 「刺青殺人事件」
 - ― 高木彬光の誕生
- 第8章 新聞統制の解除
- 第9章 三浦哲郎・寺山修司の描く戦後青森県
- 第10章 平井信作

「生柿吾三郎の戦歴」

第11章 県内の文芸誌復興

(児童、川柳、俳句、短歌、詩、総合)

第12章 平成の戦争文学

(木村友祐・高橋弘希) 付

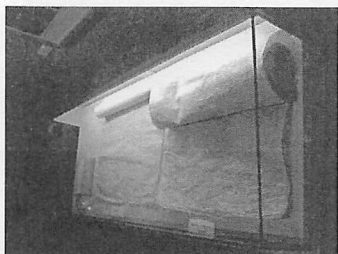
戦後70年青森文学年表

11月15日の日曜講座、「戦後、青森文学の復興―紙にまつわるエトセトラ」(担当西谷)には20名のご参加をいただきました。本展示の中から、戦後入手困難だった「紙」にまつわるエピソードをご紹介します。

【展示資料紹介】

◆風船爆弾原紙

青森空襲の夜も句会を開いていた青森俳句会は戦後間もない2月、俳誌「暖鳥」を創刊します。創刊号の表紙は、青森高校の教師で寺山修司の俳句の先生として有名な書家、宮川翠雨さんが一冊一冊手書きした物です。順調にスタートした「暖鳥」でしたが、極度の紙不足で継続した出版ができなくなり



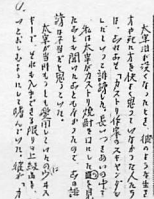
画像・風船爆弾原紙展示風景

ました。創刊メンバーの一人で、印刷所に勤務していた石川清洋さんは沈んだ連絡船から引き揚げた紙を洗って干して乾かして印刷したと記録しています。また、後のメンバーには先輩方から風船爆弾の余った紙を印刷に使ったと聞いた方もいたようです。今回、紙組成検査等から該当号を特定しようと試みました。特定には至りませんが、ユネスコ無形文化遺産に登録された細川紙で有名な埼玉県小川町からお借りし、当時の「暖鳥」とともに展示しました。

◆今官一原稿「カストリ雑誌に栄光あれ」
初公開資料。昭和52年刊「艶楽書館」古書店より購入しました。

本資料で、今官一は「カストリ雑誌は、統制外の質の悪い紙を使って出版されたことや、雑誌時代がエロ・グロ系の内容を掲載していたことから蔑視され、「カストリ作家」と呼ばれる書き手たちも、自嘲的であつたけれども、

カストリ雑誌展示風景



今官一原稿「カストリ雑誌に栄光あれ」

敗戦後の日本文学の可能性を開花させ、時代はこれらを求めていたとして、貴重であるとし、「カストリ雑誌」に栄光あれ!! アウトロウ(法外者)よ、永遠に!!」と結んでいる。

本資料と共に当館所蔵の110点のカストリ雑誌も展示し、来館者の注目を集めました。

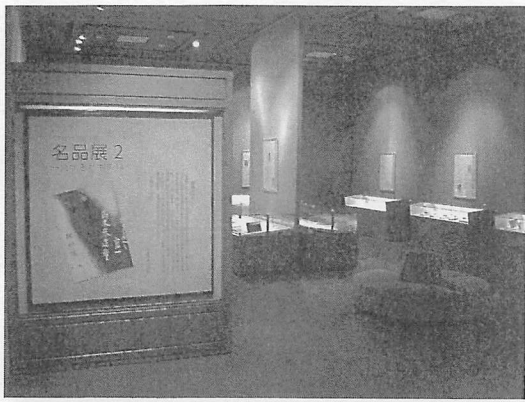
◆新聞記事「ホープ青森漫訪記③」

「ホープ青森漫訪記③」は太宰が亡くなる一月半ほど前の昭和23年4月25日付「デーリー東北」に掲載された記事で、太宰への突撃取材の様子が掲載されています。幾つかの興味深い事柄について太宰自ら記者に話している貴重な資料です。「太宰」という筆名は弘前高校時代の同級生からとったのではないということ。県民の感情に対する異様な反応。「貴族文学」と言われたことに対する反発。「如是我聞」について、この時点ではまだ特定の文人を批判するつもりはなかったという回答。インタビュ어가嫌いだということ。13回で未完となった「グッド・バイ」は84回くらいの連載になる予定だったこと。不意を突かれたからなのか、青森の新聞社と聞いたからなのか、記者の迫力に負けたのかはわかりませんが、サービスピ精神過剰で、気まずい雰囲気になることを極端に恐れ、絶えず冗談を言ったり、笑わせたりすることに必死だったという太宰の一面が窺える記事です。本資料は八戸市立図書館より借用し展示しました。

(西谷ともえ、青森県近代文学館主幹)

企画展「青森県近代文学館名品展2」 —文学者たちの絆— 開催報告

4月25日(土)から6月21日(日)まで、企画展「青森県近代文学館名品展2—文学者たちの絆」を開催しました。本展は大好評いただいた「開館20年記念青森県近代文学館名品展」の第二弾として開催し、会期中は二、七六六人の方に足を運んでいただきました。総資料点数は133点。青森県人同士、また中央で活躍する著名な文学者等との交流から生みだされた豊饒なる青森文学を、十二のエピソードと資料を通じてご紹介しました。



5月31日の日曜講座(伊藤担当)「名品に見る文学者たちの絆」の参加者は24名でした。ご来館ありがとうございます。

【エピソード紹介】展示パネルより

◆『若菜集』が結んだ絆

明治28年、黒石出身の鳴海要吉(明治16〜昭和34)は、経済的な理由から黒石尋常高等小学校を中退、弘前の小間物屋に丁稚奉公に出されるが、二か月余りで黒石に戻ることになる。30年には、片恋の懊悩、進学できない寂しさから逃れるために家出上京するも、間もなく黒石に連れ戻される。失意の中、要吉は島崎藤村(明治5〜昭和18 岐阜県生)の新体詩集『若菜集』に出会い、「生まれて初めてのオアシスを見出したような狂気を覚えた」と記している。

『若菜集』に触発された要吉は、藤村風の浪漫的な七五調新体詩を作り始め、それはやがて要吉の処女詩集『乳涙集』(明治37年7月)へと結実していく。さらに要吉は、信州小諸の藤村に手紙を書き送るようになり、藤村との文通が始まることとなった(明治36年)。

その頃、要吉と同郷で幼なじみの秋田雨雀(明治16〜昭和37)は、早稲田大学英文科に進学し、恵まれた文学的環境の中で学生生活を送っていた。明治37年6月、雨雀は、新体詩集『黎明』を刊行。雨雀もまた『若菜集』に、大きな影響を受けていた。

同年7月、要吉のもとに藤村から一通の葉書が届く。函館へ行く途次、青森で会おう、というものだった。長編小説『破戒』の出版費用を妻の実家に用立ててもらったための函館行だった。要吉は、帰省中だった雨雀とともに、予定の急行が到着する朝、高鳴る鼓動を押さえつつ藤村を待った。藤村の顔をよく知らない二人は、改札口で誰彼と無く「島崎先生ではありませんか」と、おろおろ訊ねた。

ところが、予定の時刻が過ぎ、次の列車が到着しても藤村は現れなかった。昼近くなつた頃、雨雀に会釈しているらしい人が要吉の目に映った。その瞬間、その人は要吉へ、「鳴海君?」と、顔を向けていた。

「あつ、先生ですか!」
明治37年7月26日、後に日本の口語短歌の先駆者となる鳴海要吉と、戯曲・翻訳・小説・児童文学他幅広い活躍を見せることになる秋田雨雀は、青森駅で、あこがれの島崎藤村と運命の出会いを果たすこととなった。

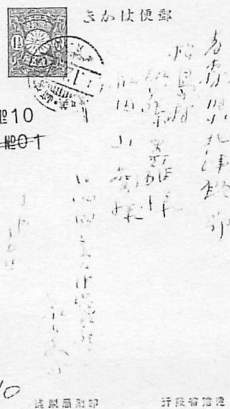
◆五所川原を訪れた牧水

明治37年、無二の友・加藤東籬とともに県内初の新派和歌結社「蘭菊会」を立ち上げた北津軽郡松島村生まれの和田山蘭。「歌人として己に忠実に生きんがため」、大正2年に上京、若山牧水の歌誌「創作」に参加し、同誌の編集に携わった。牧水も山蘭も酒が強く、会っては飲み、飲んで歌の批評

に花を咲かせたという。山蘭は、雑誌の経営不振に際し、牧水を誠心誠意支え、牧水の山蘭への信頼は絶大なものがあつた。

一方、郷里に一人残された加藤東籬は、松島村の生家で孤独と対峙し、重苦しい心を抱えながら日々を過ごしていた。数年前、山蘭同様、再三にわたり牧水から上京を勧められたことを思い出しつつ、どうにもならない寂しさを歌に詠み出していた。

牧水が初めて松島村を訪れたのは、まだ雪の残る大正5年の早春だった。歌誌「創作」の社友との交歓、そして長年の間文通を続けていた加藤東籬と会うためであった。大沢迦敷で下車した牧水を出迎えた歌人・林柁次郎、毛内友七の二人は、牧水を馬に乗せて五所川原へ向かった。目的地まであと2キロほどの所に至った時、遠くから手を振り小走りに来る者があつた。到着を待ちわび、居ても立ってもいられず迎えに来た東籬達であつた。牧水は文通を通して長年励まし合っていた東籬に初めて会い、何も言うことができなかったという。



若山牧水 東籬・山蘭あて葉書
大正元年12月15日付け

エクステンド常設展示修司と修治

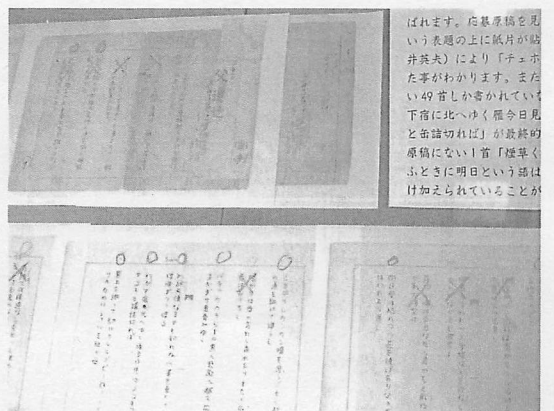
会期 平成27年6月5日(金)～

11月25日(水)

近代文学館は、平成24年度に開館20年を迎え、新たなスタートを切りました。開館以来常設展示してきた青森県を代表する13人の作家たちに新しい視点で迫り、特定の作家に焦点を当てて拡大展示を行う「エクステンド常設展示」をスタートさせました。その第一回となるのが「エクステンド常設展示 修司と修治」取り上げた作家は「寺山修司」と「太宰治」です。

平成27年に生誕80年を迎えた寺山修司は、中学校時代から小説や詩、俳句を作り、ガリ版刷りの文芸誌「白鳥」を発行するなど、その早熟な才能を開花させました。19歳の時に「チェホフ祭」で、活躍の場が全国へと広がります。

若き日の寺山を物語る資料として、野分中学校時代の文芸部誌「若潮」「白鳥」、回覧雑誌「二故郷」、青森高校時代の俳誌「牧羊神」に加え、「チェホフ祭原稿」(複製・個人蔵)を展示しました。これは、「短歌研究」(角川書店)の第二回五十首応募作品で特選に選ばれた際の応募原稿です。原稿に貼り付けられた表題「チェホフ祭」の下には、寺山の筆跡で「父還せ」と書かれており、発表時のタイトルと原題が異なっていたことや、応募した際規定の50首に一首足りない49首であったこと等が



応募原稿を見れば、応募原稿の上に紙片が貼られていることがわかります。応募原稿は「チェホフ祭」となっており、また、49首しか書かれていないことがわかります。応募原稿は「チェホフ祭」となっており、また、49首しか書かれていないことがわかります。

分かる非常に興味深い資料でした。この他にも、当館初公開の「寺山修司ニユースレター」(一九七八～七九)等展示しました。

また、7月に寺山の「天井棧敷」直系の演劇実験室「万有引力」による「奴婢一般に関する総則」が県内で公演されるのに合わせ、期間限定で「物語」奴婢訓「草稿」を展示しました。さらには、寺山ワールド様のご厚意によって、生涯のパートナーであった九條映子氏に宛てた初々しいラブレターも特別に展示することが叶い大変豪華な展示内容となりました。

明治42年に県下屈指の大地主の子として生まれた太宰治は、本名を津島修治といい、「二十世紀旗手」に「罪、誕生の時刻に在り」とあるように、罪の意識を持ちながら昭和23年に亡くなるまで、破滅的な生活の中から珠玉の名

作を生み続けました。今回の展示では、まだ「修治」だった「太宰治以前」・前期・中期・後期毎の活動を概観し、太宰を身近に感じてもらうことを意識した構成としました。「最期の太閤」が掲載された青森中学「校友会誌」第34号、旧制弘前高校在学時の同人誌「細胞文芸」創刊号をはじめ、自筆資料の展示に加えて「太宰着用の着物」「ネクタイ」を展示しました。

また、現在活躍中の八戸市出身の木村友祐氏、そして芥川賞を受賞した太宰治大好き芸人・又吉直樹氏から今回の展示に際して寄せていただいた、太宰治への思いを綴った色紙を展示することができました。現在大人気の又吉氏の色紙とあって、これを見るためやってきましたという若い方が大勢いらっしゃったのが印象的でした。

第14回青森県近代文学館川柳大会

2月28日(日)、第14回青森県近代文学館川柳大会を県立図書館集会所で開催いたしました。今回の宿題は「杭」「ぼっかり」「チャンス」「旅」、当日発表の席題は「鈴木喜代春の書」でした。昭和35年開催の「おかしようき10周年記念大会」(杉野十佐一披露、川上三太郎講演・批評吟)録音を聴く会、柳誌の展示・交換会も行われ、参加者95名を数える盛会となりました。

席題「鈴木喜代春の書」吉川ひとし選

ひとつぶも無駄にはしない木の微熱 岩崎眞里子

席題「鈴木喜代春の書」笹田かなえ選

百年の銀杏ひかりを爪先に 吉見恵子

席題「杭」奈良一艘選

一本の杭肉の肉骨の骨 香田龍馬

席題「杭」沢田百合子選

乱杭菌を生きるアウトローを生きる きさらぎ彼句吾

席題「ぼっかり」千葉風樹選

母逝った夜にも月はでるのだな 沢田百合子

席題「ぼっかり」横澤あや子選

イマジンが響くドーナツの穴で 奈良一艘

席題「チャンス」寺田北城選

一振りで虜にします隠し味 千葉かほる

席題「チャンス」碧井漢翠選

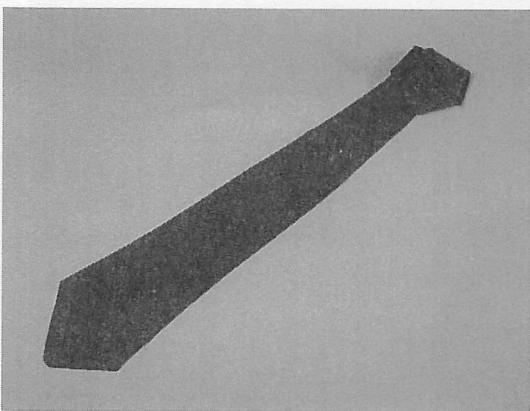
普段着のままでチャンスは来るらしい 三浦蒼鬼

席題「旅」田中かかし選

右足は旅左足は徘徊 むさし

席題「旅」偉田州花選

ワタクシノフネニコンパスナドイラヌ 須藤しんのすけ



開催中

企画展「本はもう一人のわたし」
児童文学者・鈴木喜代春」
会期 1月30日(水)〜4月10日(日)

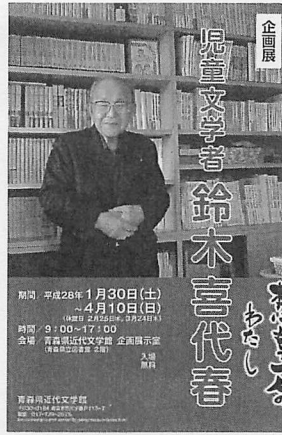
青森県南津軽郡田舎館村に生まれた鈴木喜代春(大正14〜)は、無着成恭の「山びこ学校」昭和26年(と並び称せられる、黒石小学校四年生の生活記録「みつばちの子」(昭和27)で、日本の生活綴方教育史に大きな足跡を残すとともに、「社会科検証学習」によって全国に知られた教育実践者でした。戦後間もないころ、社会科の授業を進めていった喜代春は一つの壁に突き当たります。農村に暮らす子どもたちが自分たちの置かれた厳しい現実を知るにつれ、どんな希望を失っていき、よりよい生活を切り開くための社会科の学習が、全く逆の結果を導いてしまっていたことに気づいたのです。喜代春は悩んだ末、「物語」を教材として取り入れることを考えつきます。喜代春は、困難な状況にあっても、夢や理想を抱いて乗り越えていく人間の姿を描いた子ども向けの「物語」を探しましたが、学習に用いるのにふさわしいものはなかなか見つかりませんでした。

「無いならば、自分が書くしかない」
—そう考えた喜代春は、物語を自作し、学級文集に載せて教材としました。この作品が後に『北風の子』(昭和37)として刊行されることになりました。子どもたちの目に輝きが戻るのを見て大きな手応えを感じ、その後も「人間の教科学習」にするため『北海の道』(昭和41)、『白い河』(昭和44)、『二つの川』(昭和46)、『空を泳ぐコイ』(昭和48)、『飢餓の大地・三本木原』(昭和52)、『ほおずき忠兵衛』(昭和55)等、次々と作品を書いていきました。やがて高度経済成長の時代に突入す

ると、世の中は、効率と金に目を奪われるようになり、多様で存在自体が尊い「人間」を見失っていきます。学校では偏差値を絶対視するようになり、落ちこぼれが生まれ、自殺する子どもたちまで現れるようになりました。この風潮を嘆いた喜代春は、「学校の主人公は子ども」の信念のもと「ダメな子シリーズ」をはじめとする「学校も」を書き始めます。こうして刊行された喜代春の著書の総数は200冊にもほります。

この企画展は、時代の嵐に翻弄されながらも屈することなく、戦後70年間にわたって教育に「人間」を取り戻そうと、信念をもって作品を書き続けた児童文学者・鈴木喜代春の歩みを、その作品とともに紹介するものです。

鈴木喜代春の歩みを12枚の解説パネルにまとめ、時代背景と重ねて理解していただくようと考えて年譜を添えています。



◆「展示資料紹介」
『みつばちの子』(青森県黒石小学校四年生の生活記録)

鈴木喜代春は、昭和20年9月に青森師範学校を卒業し、終戦の混乱を引きずる学校現場で、民主主義教育の理想を実現しようと奮闘します。試行錯誤の末、子どもたちに自分の生活を事実どおりに書かせ、その作品を集団の中で検討し、現実認識を育てていく「生活綴方(せいいかつづりかた)」という方法にたどり着きます。丁寧で粘り

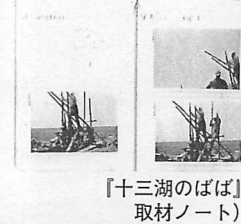
強い指導により、昭和27年2月、担任する黒石小学校四年五組の学級文集『みつばちの子』が、「全日本小・中学校文集コンクール」で特選に選ばれます。翌月には東洋書館から単行本で『みつばちの子』が出版され、全国から注目されることになりました。



喜代春は、「人間」が困難な状況下でも理想を抱き、乗り越えていく存在であることを子どもたちに知らせるため、貧しい水田米作地帯で希望を失わずに生きる少年の物語「北国の道」を自作し、松戸市立高木第二小学校5年生の学級文集「むぎの子」に8回にわたって連載(昭和30〜31)します。この作品は後に、『橋のない川』で著名な作家住井すゑの推薦により『北風の子』(昭和37)として刊行されました。



『十三湖のばば』
昭和49年 偕成社



『十三湖のばば』
取材ノート

また、全国学校図書館協議会主催の青少年読書感想文全国コンクール課題図書に指定された『十三湖のばば』(昭和49)も「北風の子」同様、知識ばかりになりがちな「教科教育」に「人間」を取り戻すために書いた作品でした。

◆「学校に『人間』を取り戻す作品」
『加木九太郎校長先生』(京子のダメ先生日記)

昭和50年代に入ると「偏差値絶対」が進んで「落ちこぼれ」という言葉が生まれていました。「学校の主人公は子ども」、子どもを人間にするのは先生だ」と考えた喜代春が書いた作品が『加木九太郎校長先生』(昭和54)でした。ここに登場する校長先生は、子どもと一緒に竹馬に一生懸命になり、道端の野いちごを口に入れて食べられるんだと教えたり、そんな行動をお母さんたちから非難されて「しつかりしなくちゃ」とつぶやく人間味あふれる人物です。喜代春は、「校長」を「人間」にして、「人間」のいる「学校」にしようとしたのでした。これが喜代春の「教室もの」の最初の作品でした。

続いて、教師を「偏差値教師」から「人間教師」にする作品として『京子のダメ先生日記』(昭和54)を発表します。思うように子どもたちが動かないことを叱りつける先生が、子どもたちと関わり合う中で変わっていく姿を描いた作品でした。



『加木九太郎校長先生』
昭和54年 国土社

開催中

エクステンド常設展示 葛西善蔵

会期 平成27年12月3日(木)～
28年5月29日(日)

「エクステンド常設展示」第2弾では「私小説の神様と呼ばれた男」という副題の下、葛西善蔵を取り上げました。総資料点数は40点、本年5月29日まで観覧可能です。

明治20年に弘前で生まれ、旧・碓ヶ関村で少年時代を過ごした葛西善蔵は「文芸の前には自分は勿論、自分に付随した何物をも犠牲にしたい」という決意の下、文学者を志し、大正元年には「哀しき父」を発表。大正8年には『子をつれて』を刊行しました。昭和3年に41歳で亡くなるまでの間、身を削るようにして珠玉の作品を遺し「私小説の神様」と呼ばれました。

今回の展示では、葛西善蔵と他の作家たちとの繋がりが見える資料を紹介することに力を注ぎました。芥川龍之介は善蔵文学について「雨中の風景に似た或美しさを捕へて居る」と言及し、井伏鱒二は「葛西善蔵氏が思ひをこめて全生涯を小説にただきこんだ度胸と信念とに対して私は並々ならぬ敬意をいだいてゐる」と述べています。佐藤春夫は「群像」昭和39年6月号掲載の座談会「大正作家」の中で、善蔵について「高く評価していました。今も認めます」、「大正期の代表的な作家の一人」と讃える発言を繰り返しました。

展示の冒頭では、これら諸作家の善蔵文学に関するコメントをパネルの形で紹介しました。

当館の常設展示作家の中には、善蔵と関わりの深かった人物が少なくなく、各人のコーナーやパネルに近接する形で資料を公開したことは今回の展示の大きな特色です。主要なものを列挙すると、まず、晩年の善蔵を支えた佐々木千之が「自分をモデルにした小説を書くように」という故人との約束を果たし、昭和18年に刊行した『葛西善蔵』。平井信作の文章「私小説の神様 葛西善蔵」が掲載された「東奥日報」(昭和31年1月20～21日)切り抜き。石坂洋次郎が善蔵との初対面の思い出を綴った「葛西善蔵氏の覚え書き」、これを収めた随筆集「われら津軽集なり」。太宰治の小説「善蔵を思ふ」が掲載された「文藝」昭和15年4月号。今官一が太宰と二人で津軽に善蔵碑を建てようとして計画していたことを明かしたエッセイ「碧落の碑」(「太宰治の肖像」所収)等々、枚挙にいとまがありませんが、竹内俊吉や高木恭造、一戸謙三、鳴海要吉、村次郎、三浦哲郎、長部日出雄との関係に由来する資料も展示することができました。

展示全体を通して、葛西善蔵は同時代の作家たちから一目置かれる存在であったこと、本県出身の後輩作家たちに多大な影響を与えたことが見えてきました。ひいては、いかに影響力を持った作家であったかという点を浮き彫りにできたのではと思っております。

「日曜午後の朗読会」

「大人になった今だからわかる本の味わいがある——日曜日の午後、文学館の明るいろビーでソファに腰をおろし、作品に耳をかたむけませんか」今年度の文学館のテーマ、「戦後70年」に合わせ、朗読会は「戦争と青森文学」をテーマに10回開催し、のべ76名の方にご参加いただきました。

昨年度末、解説員の任期満了により、4月から解説員2名が配属となりました。制服デザインも一新し、フレッシュなメンバーでお届けしました。

- ① 6月14日 「太宰治①」 ～「お伽草紙」
- ② 7月5日 「太宰治②」 ～「正義と微笑」
- ③ 7月19日 「北村小松」 ～「燃ゆる大空」
- ④ 8月9日 「今官一①」 ～「不沈(戦艦長門)」
- ⑤ 9月6日 「石坂洋次郎①」 ～「マヨンの煙」
- ⑥ 9月27日 「三浦哲郎」 ～「15歳の周囲」
- ⑦ 10月11日 「今官一②」 ～「幻花行」
- ⑧ 10月19日 「石坂洋次郎②」 ～「青い山脈」
- ⑨ 11月1日 「北島八穂」 ～「12才の半年」
- ⑩ 11月22日 「鈴木喜代春」 ～「白い河」

パネル展開催

特別展「三浦哲郎」をはじめ、地域の施設・学校・諸団体等の協力を得て開催いたしました。会場・期間は次のとおりです。

◇「斗南藩と文学」パネル展
横浜町ふれあいセンターホール
4月10日～5月19日

◇「太宰治」パネル展
ふかうら文学館
5月24日～6月21日

青森北高等学校
7月18日～19日

◇「三浦哲郎」パネル展
八戸高等学校
7月10日～12日

岩木高等学校
7月18日～19日

◇「太宰治生誕100年」パネル展
三沢高等学校
7月16日～20日

木造高等学校
10月28日～11月2日

◇「西北五文学散歩」パネル展
板柳高等学校
7月18日～19日

◇「成田千空」パネル展
ふかうら文学館
8月30日～10月4日

◇「寺山修司没後30年」パネル展
青森中央高等学校
7月18日～20日

リンクモア平安閣青森市民ホール(生誕80年寺山修司の言葉展内)
12月5日～15日

◇「青森県近代文学館・名作展」パネル展
高等学校教育研究会国語部会東北大会
11月12日～13日

八戸高等学校
11月14日～16日

◇特別展「青森の文学者たちの戦前・戦中」パネル展
総合社会教育センター(生涯学習フェア)
10月3日

木造高等学校
10月21日～27日

名久井農業高等学校
10月31日～11月1日

青森高等学校
11月25日～12月1日

◇「高木彬光」ミステリーの魔術師「パネル展」
総合社会教育センター(あります)
11月18日～12月20日



資料寄贈者紹介

◇次の方々から資料を寄贈していただきました。誠にありがとうございました。今後とも当館へのご支援、ご協力を賜りますようお願いいたします。

今期の寄贈(平成27年1月～12月)

- 青森県高等学校図書委員研修大会事務局「平成26年度第25回青森県高等学校図書委員研修大会」
○青森県高等学校文化連盟「高文連紀要」第36号
○青森県詩人連盟「県詩連詩集 岬二〇一五年版」
○青森県児童文学研究会「あおもりの童話」
○青森県退職高等学校校長会「さつき会」一「さつき会たより」第31号二冊
○青森県版画会「青森版画」第一二三号
○青森県立八戸北高等学校「北はきびしくきよきもの 青森県立八戸北高等学校創立五十年記念誌」
○青森公立大学国際芸術センター青森「AC2」
○青森市川柳連盟「第51回青森市民文化祭川柳大会」二冊
○あおもり草子編集部「あおもり草子」第一三四号他雑誌一冊
○青森文芸出版「会報『千空研究』」第1号他雑誌五冊・図書三冊
○あしかげ社「『蘆光』」第205号二冊
○尼崎市総合文化センター「『文芸作品集』」
○新谷ひろし「新谷ひろし句幅等四十三点・暖鳥」関係資料七一〇点他雑誌十九冊・図書四冊
○市川市文学ミュージアム「『炎の入式場隆三郎』」
○一戸晃「『重細亜の鹹湖』他図書十二冊・雑誌

- 八十冊・特殊資料二十一点
○一茶記念館「『小林一茶百八十九回忌 全国俳句大会作品集』」
○伊藤整文学賞の会「『伊藤整文学賞二十五の歩み』」
○糸の会「『合同句集 糸』」
○伊奈かつべい「CD『詠りは人のためならず』」
○井上直哉「『機械化小説 亜成層圏』」
○井村行子「福士幸次郎関係資料八十五点」
○岩崎潤子「稲垣浩短冊一点・柳原白蓮歌額一点 他特殊資料二点」
○いわき市立草野心平記念文学館「『草野心平の詩 視覚詩編』他図書一冊」
○ういむい未来の里OSO「『詩集 森の詩』」二冊
○梅内美華子「『ここからはじめる短歌』」二冊
○F.SUPPLY「『奥津軽五所川原』」
○おうよう句会「『句集 秋の蝶』」
○大沢千晶「『川柳八甲田』他図書六冊・雑誌六七〇冊・特殊資料三三〇冊」
○大平利成「『まるめろ』」
○大田区立郷土博物館「『大田区立郷土博物館所蔵文学関係資料目録』」
○大庭れいじ「『歌集 ノーホエア・マン』他図書一冊」
○大鰐町温泉俳句の街づくり実行委員会「増田手古奈俳句かるた」
○小笠原茂介「『雪灯籠』他雑誌二冊」
○小野寿子「『句集 角巻』」
○小山正見「『小山正孝全詩集』全二巻」
○かごしま近代文学館「『梅崎春生×遠藤周作』」
○風詩社「『詩誌 風』」第115号二冊他雑誌四冊
○神奈川文学振興会「『生誕140年 柳田國男展』他図書三冊」
○金木太幸会「『会誌 馬亮』」第十七集
○鎌倉文学館「『特別展 スーパーストーリー 源氏物語』他図書一冊」
○鎌田紳爾「『藍生』」第293号
○河口俳句会「『河口三十五周年記念合同句集』」
○菊池寛記念館「『菊池寛記念館収蔵資料目録』」
○北九州市立文学館「『ブンガク最前線』北九州

- 発」他図書一冊
○北九州市立松本清張記念館「『畠人 松本清張と東西文化交流 平山都夫原画+ガンダーラ仏』他図書一冊」
○木村勝一「『海猫ツリハウス』オブジェ 他特殊資料三三〇冊」
○木村捷則「木村助男作品朗読CD」
○木村友祐「色紙『通学路の途中...』」他雑誌一冊
○木本朱夏「手書き句集『不浪人?』」
○久慈さき代「『歌を出ると文豪の街 大宰治』思ひ出』の街検証』二冊」
○工藤邦男「『潮音 創刊百周年記念号』」(101~7)
○黒石文学会「『ことばの森』」第八号
○黒岩恭介「『綺想の風土あおもり』」
○群馬県立土屋文明記念文学館「『文豪 田山花袋』近代の小説を模索した日々』他図書三冊」
○月刊弘前編集室「『句集 心陽と千枝』」
○高知県立文学館「『宮尾登美子 八十八年の生涯を偲んで』」
○交通新聞社「『交通新聞』」第20265号二部
○こおりやま文学の森資料館「『ふくしまの女流文学者たち』中央の文学から土着の文学へ』」
○小嶋洋輔「『中間小説誌の研究』昭和期メディアア編成史の構築に向けて』」研究報告書
○五所川原市教育委員会「『太宰備忘録』」
○五所川原俳句会「『第五十五回五所川原市文化祭 祭原下俳句大会入選句集』」二冊
○小寺等之「『空飛ぶ鉄犬』」CD入りDVD
○小諸・藤村文学賞事務局「『第二十一回小諸・藤村文学賞入賞作品集』」
○さいたま文学館「『風と光の詩人 宮澤章二』」他館報二冊
○齋藤美穂「『方言詩集 まるめろ』」他図書二冊
○堺市立文化館「『与謝野晶子文芸館』」与謝野晶子文芸館の軌跡』」
○桜庭和浩「『映画 津軽』」関係資料二点・図書一冊
○佐々木恵実子「『壺』」他図書三冊・特殊資料一点

- 佐々木達司「『田名部町誌』」他雑誌五冊
○佐々木久枝「『佐々木久枝歌集 万葉幻想』」二冊
○薩摩川内市川内まごころ文学館「『山本實彦クロニクル』」
○鹿内伸也「『歌集 雪の色』」二冊
○自作詩を朗読する会「『エディヤ』」4号
○清水雪江「『成田千空句碑写真一式』」
○清水義和「『メディアアと芸術』」他図書一冊
○城西川柳愛好会「『自由席』」二冊
○詩霊の会「『詩霊』(2-1)』」他雑誌一冊
○杉野利久「『杉野美友関係資料三三五点』」
○鈴木啓孝「『原敬と陸羯南』」
○世田谷文学館「『世田谷文学館資料目録 3 植草甚一 関連資料』」
○瀬戸口宣司「『詩』という場所』」
○仙台文学館「『とんとんかん』』創刊号 他図書三冊
○川柳ゼミ「『青い実の会』』「珈琲時間Ⅲ』」他雑誌一冊
○高木晶子「『鬼』」第4号 他図書一冊・雑誌二冊
○高木保「『菊谷栄関係資料五五五点』高木恭造関係資料二点・高木彬光関係資料二十二点』」
○高橋弘希「『色紙 指の骨』」
○竹森茂裕「『北奥気圏10周年パネルドアスカッション』DVD 他特殊資料二点・雑誌一冊』」
○田坂憲二「『名所旧蹟』」
○多田暉代「『多田不二来簡集』」
○蠶の会「『蠶』」第54号 他図書二冊・雑誌一冊
○館田勝弘「『和田山蘭短冊』」他図書三冊
○短歌結社「『草の会』』平成二十六年年度歌会詠草集』水芭蕉』二冊』」
○運筆堂文庫「『ここが地球の中心 井上ひさしと運筆堂文庫』」
○潮音社「『太田水穂歌集』」
○調布市武者小路実篤記念館「『春の特別展 人の男』」他図書一冊
○津軽アスナロ短歌会「『合同歌集 岩木嶺』」第十一集

- 土浦市立博物館「戦争の記憶」
- テラヤマワールド「寺山修司のラフレター」
- 東奥日報社「東奥文芸叢書」三十三冊 他図書五冊・雑誌一冊・特殊資料一点
- 徳島県立文学書道館「黒潮の碑文」他図書二冊
- 豊島区立雑司が谷旧教師館「トキワ荘のヒーローたち」マンガにかけた青春」
- 十和田短歌会「合同歌集 郡山第八集」
- 永岡孝一「寺山修司」ボクサー」ポスター二点
- 中原中也記念館「特別企画展 萩原朔太郎と中原中也」
- 中村和美「暁の合唱」他図書二冊
- 中村キネ「流」No.6号二冊 他雑誌二冊
- 成田市子「成田千空原稿四点」
- 成田本店「合同歌集Ⅱ環」
- 新美南吉記念館「赤いろうそく 第二十六回 新美南吉童話賞入選作品集」
- 西尾市岩瀬文庫「詩人茨木のり子とふるさと西尾」
- 西谷是空「きじ鳩」一七七冊
- 日本現代詩歌文学館「いまを生きたる詩歌」
- 乳井昌史「南へと、あくがれる——名作とゆく山河」
- 野沢省悟「諸川柳人及び成田千空関係資料三十三点」
- 野辺地町教育委員会「野辺地ふるさと文学散歩」
- 野見山陽子「コブトリ」
- 階上町教育委員会「はしかみ川柳会」第六集
- 林 桂「句集ことのはひらひら」
- ハンセン病文学読書会「ハンセン病文学読書会のすすめ」
- 姫路文学館「特別展「こころ」から百年 夏目漱石」漱石山房の日々」
- 平野敏「詩季私界」
- 平山昭弘「詩集 INDIAN SUMMER」
- 弘前学院大学地域総合文化研究所「地域学」十一巻
- 弘前市立郷土文学館「陸羯南展」
- 弘前文芸協会「文芸弘前」第26号三冊
- 「ふくい風花随筆文学賞」実行委員会「第18回 ふくい風花随筆文学賞入賞作品集」
- 福井県ふるさと文学館「津村節子と吉村昭 果てなき旅」
- 福士光生「福士光生句集 福士光生物語」二冊・特殊資料一点
- 福士修二「佐藤佐太郎関係資料三点・福士修二関係資料一点」
- 福村忠夫「溢る、涼味」他図書二冊・雑誌五十二冊
- ふくやま文学館「福山の文学 第16集」他図書一冊
- 古川智映子「小説 土佐堀川」二冊 他図書二冊
- 文京区立森鷗外記念館「流行をつくる——三越と鷗外」他図書一冊
- 文芸コンクール実行委員会「第25回青森県民文化祭文芸コンクール入選作品集 2015」
- 北京知日文化伝播有限公司「知日32」
- 法政大学「ポアンナード・梅謙次郎 没後一〇〇周年記念冊子」(上) 報告集 他図書一冊
- 北海道川柳連盟「北海道川柳連盟五十年史」
- 北海道立文学館「小樽山博の文学」
- マイナビ「万年筆の図鑑」
- 前橋文学館「三角みづき 隣人のいない部屋から」他図書三冊
- 笹谷伸夫「2015年版ワタシが薦める一冊」
- 又吉直樹「色紙」思春期の頃から」
- 松山市立子規記念博物館「第二十回 はがき歌」全国コンテスト作品集」他図書一冊
- 三浦康久「三浦哲郎新聞連載切り抜き 他特殊資料三点」
- 三野亜沙子「旅の詩集」他図書三冊
- 宮沢賢治学会イーハトーブセンター「宮沢賢治研究 Annual」第二十五号
- 宮本史朗「詩集 蟬時雨が降る頃」二冊
- 陸奥新報社「陸奥新報」日刊第24266号
- 無名社「無名群」93号二冊
- メディアファーム株式会社「葛温泉検定帳」
- 安水稔和「安水稔和詩集成上」他図書一冊
- 山梨県立文学館「芥川龍之介の夏休み」
- やまなし文学賞実行委員会事務局「山峡」
- 吉崎光「詩集 草の仲間」
- 吉田徳壽「八戸」第74号 他雑誌四冊
- 立教大学出版部「昭和一〇年代の文学場を考える——新人・太宰治・戦争文学」
- 麗人社「美術屋・百兵衛」第33号
- 会津八一記念館「雁魚來往(三)」
- 青嶺俳句会「青嶺」
- 青森アララギ会「青森アララギ」
- 青森県歌人懇話会「青森県歌集」
- 青森県観光連盟「あおもり教育旅行ガイドブック 2015」
- 青森県教育厚生会「三潮」
- 青森県郷土作家研究会「郷土作家研究」
- 青森県現代俳句協会「青森県現代俳句年鑑」
- 青森県川柳社「ねぶた」
- 青森県俳句懇話会「新青森県句集」
- 青森古今短歌会「青森古今」
- 井上康「みちのく春秋」
- 井上靖記念文化財団「伝書鳩」
- 井上靖研究会「井上靖研究」
- 大久保健隆「川柳うまつこ」
- 小笠原茂介「第三次 BRA」
- 小田桐優子「俳句鼎抄」
- 鬼「鬼」
- 小山正見「感泣亭秋報」
- 海光発行所「同人誌」海光」
- 金沢文化振興財団「研究紀要」
- 北九州市立松本清張記念館「松本清張研究」
- 北の街社「北の街」
- 陸羯南会「陸羯南会誌」
- 黒艦隊「俳句同人誌 黒艦隊」
- 群系の会「群系」
- 蕙風発行所「蕙風」
- 群馬県立土屋文明記念文学館「群馬県立土屋文明記念文学館 紀要」風」
- 勁草社「勁草」
- 月刊弘前編集室「月刊弘前」
- 越谷市立図書館 野口富士文庫「野口富士 男文庫」
- 五所川原俳句会「五所川原俳句会会報」
- 小山弘明「光太郎資料」
- 斎藤茂吉記念館「斎藤茂吉記念歌集 第四十一集」
- 朔社「朔」
- 此岸俳句会「俳誌 此岸」季刊誌 此岸」
- 紫明の会「紫明」
- 下北文化社「下北文化」
- 渋柿園俳句会「渋柿園」
- 真朱の会「真朱」
- 雪天俳句会「雪天句集 第9集」雪天」
- 全国文学館協議会「全国文学館協議会紀要」
- 川柳「風の会」風紋」
- 川柳触光舎「触光」
- 川柳ゼミ 青い実の会「青い実」
- 川柳塔みちのく「川柳塔みちのく」
- 川柳ひらひら社「川柳ひらひら」
- 外海吟社「外海」
- 泰斗舎「あおもり芸術鑑賞友の会文化情報誌 ぴーち」
- 高田寄生木「柳誌 北貌」
- 高橋憲三「飾画」
- 高山市生涯学習課「高山市近代文学館調査・研究報告書」
- たかなん発行所「たかなん」
- 太宰治スタディーズの会「太宰治スタディーズ」
- 潮音社「潮音」
- 童子津軽句会「津軽通信」
- 胴乱詩社「胴乱」
- 十和田かばちえつば川柳吟社「川柳かばちえつば」
- 中原中也記念館「中原中也研究 第二十号」
- 成田本店「波」図書「新刊展望」青春と読書」

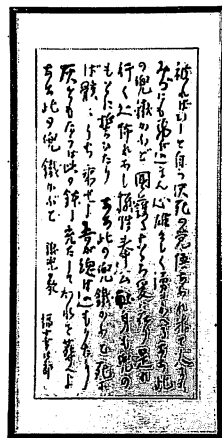
継続的な寄贈

- 新美南吉記念館―「研究紀要」
- 日本近代文学館―「日本近代文学館年誌」
- 日本民主主義文学会弘前支部―「弘前民主文学」
- 野辺地川柳社―「川柳常夜燈」
- Argonator―「本のパーキング」
- 八甲田川柳社―「川柳八甲田」
- 波瀾短歌会青森支部―「波瀾青森」
- はまなす発行所―「はまなす」
- 帆風美術館―「風」
- 萬緑青森支部―「未来」
- 萬緑発行所―「萬緑」
- 姫路文学館―「姫路文学館紀要第17号」
- 弘前詩塾―「弘前詩塾」
- 弘前川柳社―「川柳」
- 弘前大学国語国文学会―「弘前大学国語国文学」
- 弘前潮音会―「すべーす」
- 弘前文学学校―「文学いちば」
- 弘前ペンクラブ事務局―「弘前ペンクラブニュース」
- 福田正夫詩の会―「焰」
- ふだん記津軽グループ―「ふだん記津軽」
- 文藝軌道の会―「文藝軌道」
- 北苑歌話会―「北苑ノート」
- 北狄社―「北狄」
- 前橋文学館―「前橋文学館研究紀要」
- 松丘保養園慰安会―「甲田の裾」
- 山田尚―「亜土 第二次」
- 山梨県立文学館―「資料と研究」
- 悠短歌会―「悠」
- 「樫」俳句会―「樫」
- 瑠璃の会―「瑠璃」
- 石坂洋次郎文学記念館
- 泉鏡花記念館
- 一茶記念館
- 井上靖記念館
- いわき市立草野心平記念文学館
- 岩手県立埋蔵文化財センター
- 大島博光記念館
- 学習院大学史料館
- かごしま近代文学館・メルヘン館
- 神奈川文学振興会
- 金沢文芸館
- 軽井沢高原文庫
- 川西町フレンドリープラザ
- 北九州市立文学館
- 北九州市立松本清張記念館
- 虚子記念文学館
- 熊本近代文学館
- 高志の国文学館
- 高知県立文学館
- こおりやま文学の森資料館
- 埼玉文芸家集団
- 斎藤茂吉記念館
- 坂の上の雲ミュージアム
- 佐々木基一全集刊行会
- 佐藤春夫記念館
- 世田谷文学館
- せたがや文化財団
- 全国文学館協議会
- 仙台文学館
- 川内まごころ文学館
- 鷹山宇一記念美術館友の会
- 高山市生涯学習課
- 調布市武者小路実篤記念館
- 壺井栄文学館
- 藤村記念館
- 東北大学史料館
- 東北大学総合学術博物館
- 徳島県立文学書道館
- 十和田市立新渡戸記念館

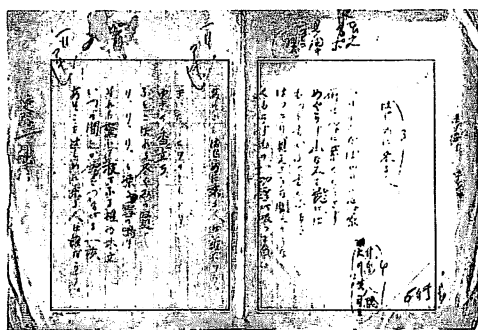
- 原中中也記念館
 - 日本近代文学館
 - 日本現代詩歌文学館
 - 俳人協会
 - 俳人協会青森県支部
 - 原阿佐緒記念館
 - 姫路文学館
 - 弘前市立郷土文学館
 - 福井県ふるさと文学館
 - 福岡市文学館
 - 文京区立森鷗外記念館
 - 北海道立文学館
 - 前橋文学館
 - 松山市立子規記念博物館
 - 三浦綾子記念文学館
 - 三鷹市山本有三記念館
 - 宮沢賢治学会イーハトーブセンター
 - 宮柁二記念館
 - 棟方志功記念館
 - 室生犀星記念館
 - 盛岡てがみ館
 - 山梨県立文学館
 - 吉川英治国民文化振興会
- (寄贈者名は五十音順で敬称を略しました。表記は資料に従って掲載いたしました。)

新収蔵資料紹介
 今年度古書店より購入した資料のうち2点を紹介します。

福士幸次郎書翰
 「鐵兜の歌」
 特別展「青森の文学者たちの戦前・戦中」で初公開。



北畠八穂自筆原稿
 「はじめに来る人」
 企画展「戦後―青森文学と青森の復興」で初公開。
 「婦人公論」昭和22年1月号に掲載された。



全国文学館協議会 共同展示

「3・11文学館からのメッセージ」
「大庭れいじの世界」開催報告

会期 3月1日(火)～3月31日(木)

「3・11文学館からのメッセージ」は全国文学館協議会が全国の加盟館に呼び掛けた共同展示で、東日本大震災という「未曾有の大災害を直視し、記憶に止め、死者たちへの鎮魂と哀悼、被災者への慰謝とコミュニケーションの復興を願って」毎年3月に開催されるものです。震災から5年を迎えた今年も、八戸市出身の歌人、大庭れいじ(昭和40-)を取り上げました。

幼少のころ病気で聴覚の7割を失った大庭は、差別やいじめに苦しんでいた中学時代に、伯母である佐々木久枝の薦めにより短歌と出会い、創作に生きる喜びを得ます。また、太宰治、三浦哲郎に影響を受け小説も書き始めます。平成20年、難病の潰瘍性大腸炎で苦しみました。奇跡的に完治します。平成23年3月11日の東日本大震災を機に、生かされた命を誰かのために有効に使いたいと考え、活動の場を外に広げました。同年第一歌集『ア・ホエア・マン』を出版したのを皮切りに、『チャリティー朗読ライブ、アート展でのチャリティー似顔絵など、文学以外の活動にも力を入れており、その活動は震災で傷ついた人々を勇気づけています。

難病と闘い、いくつもの困難を乗り越えた大庭れいじの作品からは、その経歴からは想像も出来ない程の明るさが伝わってきます。パネルには短歌をメインにした作品の掲載すると共に、イラストを配置して、明るく力強いイメージが伝わるようにしました。

館務日誌

- 4月11日 高木保氏来館
- 4月14日 高木保氏(北京知日文化传播有限公司)他5名来館
- 4月18日 西谷是空氏来館
- 4月19日 仁平政人氏来館
- 4月25日 企画展「青森県近代文学館名品展2」文学者たちの絆」開催(6月21日)
- 4月26日 木村友祐氏、木村勝一氏来館
- 5月4日 鈴木喜代春氏、他ご家族4名来館
- 5月6日 齋藤三千政氏来館
- 5月11日 岩崎潤子氏来館
- 5月13日 館田勝弘氏、浅瀬石久仁子氏来館
- 5月14日 A TV「わっち」生中継
- 5月19日 青森中央短期大学附属第一幼稚園48名見学
- 5月20日 青森中央短期大学附属第三幼稚園19名見学
- 5月21日 佐々木達司氏来館
- 5月23日 一戸晃氏来館
- 5月25日 宮本史朗氏来館
- 5月26日 浦町保育園47名見学
- 5月29日 青森中央短期大学附属第二幼稚園39名見学、梅村友千氏来館
- 5月31日 日曜講座(伊藤総括主幹)参加者24名
- 6月5日 エクステンド常設展示「修司と修治」開催(11月25日)
- 6月10日 出前講座「青森中央学院大学による公開連続講義・伊藤」参加者257名
- 6月11日 文学資料調査員会議
- 6月14日 杉野美友(遺族)杉野利久氏他1名来館
- 6月19日 津島園子氏、津島雄二氏他2名来館
- 6月20日 小熊健氏来館
- 6月27日 金木太宰会23名見学
- 6月30日 佐々木英明氏(寺山修司記念館館長)、笹目浩之氏(テラヤマワールド代表)他1名来館
- 7月1日 大館市先人を顕彰する会26名見学
- 7月8日 木村友祐氏来館。図書委員研修大会36名見学
- 7月10日 青森中央短期大学26名見学
- 7月18日 特別展「青森の文学者たちの戦前・戦中」開催(9月23日)
- 7月22日 (テープカット)佐々木達司氏、安田保民氏、佐藤幸館長
- 7月24日 板柳町子ども司書養成講座(10名)見学
- 7月25日 浦町小学校(5名)見学、青森東高校(11名)見学
- 7月26日 鳴海厚男氏(鳴海要吉(遺族)来館
- 7月26日 第一回文学講座開催(講師佐藤きむ氏、三浦雅士氏)参加者121名
- 8月4日 メイン州交流事業20名来館
- 8月5日 谷川妙子氏(大町桂月を語る会事務局)来館
- 8月20日 相模女子大学インターンシップ(23日)
- 8月23日 第2回文学講座開催(講師仁平政人氏、佐々木達司氏)参加者90名、西田哲雄氏来館
- 8月25日 青森県近代文学館評議委員会開催
- 9月3日 青森市北中学校4名見学
- 9月5日 村井村治氏(村次郎(遺族)来館
- 9月7日 辻昭子氏(青森明の星短期大学学長)、石田一成氏(青森明の星短期大学教授)来館
- 9月9日 吉永麻美氏(三鷹市芸術文化振興財団文芸企画員・学芸員)他2名来館
- 9月12日 野辺地子ども司書養成講座受講生8名見学
- 9月13日 日曜講座(竹浪主査)参加者21名
- 9月16日 街てく見学15名見学
- 9月28日 北斗高校インターンシップ3名(29日)
- 10月1日 黒石市立六郷小学校26名見学
- 10月2日 つがる市立育成小学校11名見学
- 10月5日 原明子氏(中原中也記念館学芸担当)来館
- 10月8日 中央文化幼稚園18名見学、梶浦公平氏(青森ペンクラブ会長)来館
- 10月9日 野沢省悟氏来館
- 10月13日 西北高等学校図書委員研修会48名見学
- 10月15日 全国高等学校文化連盟北海道東北文芸大会青森県大会文学研修205名見学
- 10月16日 東北町立第一小学校9名見学。青森南高等学校25名見学
- 10月21日 東奥日報移動音読教室弘前28名見学
- 10月24日 企画展「戦後」青森文学と青森の復興」開催(12月13日)
- 10月26日 黒石市中部地区社会福祉協議会38名見学
- 10月28日 七戸中央図書館12名見学
- 10月5日 図書館協議会5名見学
- 11月6日 出前講座(青森明の星短期大学・西谷主幹)参加者19名
- 11月10日 吹田孤達(遺族)御来館
- 11月11日 高木彬光(遺族)高木晶子氏他2名来館
- 11月14日 三野亜沙子氏、中沢洋子氏来館
- 11月15日 相馬信吉氏(奏海の会長)来館
- 11月15日 日曜講座(西谷)参加者20名
- 11月26日 出前講座(青森市東部寿大学・大学院講座・伊藤)参加者42名
- 12月3日 エクステンド常設展示「葛西善蔵」開催(5月29日)
- 12月10日 五所川原市赤十字団30名見学
- 12月11日 中森瑞子氏来館
- 12月13日 出前講座(太宰まなびの家・竹浪)参加者30名
- 12月22日 葛西千香子氏来館
- 1月27日 土岐泰氏(宮沢賢治学会セミナー実行委員会委員)来館

青森県近代文学館報 第三十三号
 発行日 平成二十八年三月十六日
 編集発行 青森県近代文学館(青森県立図書館内)
 〒030-0184 青森市荒川字藤戸一一九七
 電話 〇一七三九二五七五
<http://www.wild.prf.aomori.ac.jp/top/museum/>